

研究ノート

ローガンスクエア近隣地域における移民女性の エンパワメント調査第一次集計結果

仁 科 伸 子

1. 研究の目的と背景

(1) 本研究の目的

本研究は、ローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーション（以降LSNAと記述）が地域の公立学校と協働して実施しているペアレント・メンター事業の参加者のエンパワメントの状況、地域への統合、生活の変化や自立の状況が事業の参加後にいかに変化及び、その要因をアンケート調査によって詳細に探るものである。本取り組みは、シカゴ市や他のオーガニゼーションに注目されており、評価が高いものであるが、これまでに、ペアレント・メンター経験者に対しての量的調査は実施されてこなかった。この研究を通して、本事業に参加する移民女性のエンパワメントの状況を把握し、その要因に関して実証的に探求するものである。

(2) ローガンスクエア・ネイバーフッド・アソシエーションとは

シカゴは、18世紀以降、ヨーロッパからの移民を中心に受け入れてきたアメリカ合衆国の大都市のひとつである。ヨーロッパにおいて宗教問題、食糧危機、飢饉、政変等が起これると多くの移民たちがアメリカ大陸を目指してやってきた。20世紀になるとメキシコや南アメリカの政変や貧困から多くのラテン系移民が流入するようになった。ローガンスクエアは、ラテン系移民が多い地域である。

LSNAは、1962年に設立され、地域の様々な活動を担っているコミュニティ・オーガニゼーションである。住宅、法律、生活、教育などの側面から

人々の生活をサポートし、リーダーシップ開発や社会的公正のために活動する民間組織である。LSNAは地域の住民の生活に関わる問題に対応し、地域の安全性と住みやすい近隣地域のために活動を行っている。特に、教育活動は伝統的にLSNAが重点としている取り組みである。

(3) ペアレント・メンター事業とは何か

LSNAの取り組みの中でも教育事業は重要な位置づけを占めている。

ラテン系移民は20世紀以降の新しい移民として、過去の移民たちと同様の問題を抱えている。言語の違いから子どもたちが学校の授業についていけないことや、退学率が高いこと、高等教育への進学率が低いことである。親世代も言語の問題から、教育の有無にかかわらず、正規の雇用や十分な賃金が支払われる職業に就くことが難しい。

ペアレント・メンター事業は、地域の公立小学校において、授業についていくことが難しい子どもたちの隣にメンターとして地域の母親たちが座り授業を助ける取り組みである。概ね10人一組の母親グループを組織し、メンバーのうちコーディネーターがクラス担任と調整してペアレント・メンターを教室に派遣する。

この取り組みは、1995年、小学校の校長が、毎日子どもたちの送り迎えに来る母親たちが家に帰って友人もなく家に帰るとスペイン語のテレビ番組をみて迎えの時間までをすごしていると知り、LSNAに相談を持ちかけて教室での手伝いをするようになったことがきっかけで始まった。1995年から現在までの間に約15,000人のペアレント・メンターが事業に参加した。現在、LSNAは研修を行って教えるスキルや情報を提供している。

(4) 親たちのエンパワー

スー・ホンは、ペアレント・メンター事業の地域貢献性について研究し、ペアレント・メンターと活動した人々が、地域のコミュニティ・オーガナイザーや、教師として活躍し、地域に貢献していることを明らかにした

(Hong, 2011)。

2015年3月に行った調査では、10名のペアレント・メンター経験者にインタビュー調査を行い、1) 現在の状況、2) PMを始めたきっかけ、3) PMにおける体験、4) PM体験後の変化、5) これからの目標について半構造化インタビューを実施した。これらのペアレント・メンター経験者の語りをコード化して整理した結果、31項目の自己の成長に関わる項目が抽出された(仁科 伸子, 2015)。

2. 研究方法と意義

本論は、研究の一部として実施したアンケート調査の一次集計について記録するものである。

アンケート調査の詳細は以下の通りである。

調査期間：2015年8月1日～8月20日

2016年4月1日～4月30日

アンケートは、英語及びスペイン語の2種類を作成し、対応する言語に応じて配布した。

配布方法は、LSNAの協力により、各小学校のペアレントメンター・コーディネーターを通じてその地域に暮らす、あるいは、各小学校に関わるペアレント・メンター経験者に対して、アンケート票を配布、留め置きして自記入後回収した。この結果、255票が回収され、記入量の極端に少ないものは、不適当な言語のアンケート用紙が渡されたか、あるいは回答困難と考えて除外し、結果的に有効回答数は242票であった。統計処理においては、統計上欠損値があるものについては除外し、回答ごとに有効回答数を算出している。

ローガンスクエア地区で活動するLSNAが実施する移民支援活動についてはマーク・ワレンが、学校と地域のつながりの重要性(Warren R. M., 1995)、スー・ホンは、人材の地域還元性(Hong, 2011)について言及している。本研究では、社会福祉学の観点から、この事業に関する移民のイン

テグレーション、及びエンパワメントに焦点を当てている。本研究の意義は、この事業を社会科学的な立場から分析をすることによって一般化し、他の地域における移民支援のケースやその他の分野においても応用できる技術や方法に資することが可能であると考えられる点である。

なお、本研究の研究倫理については、2015年7月熊本学園大学研究活動適正化委員会における倫理審査を通過し、倫理上の問題のない研究かつ、研究方法であることを承認されている。

3. 研究結果

3.1 回答者の属性

性別 99%女性（1名のみ男性）、年齢 平均年齢37.9歳となっている。年代別では、30代が最も多く44.3%、次いで40代が32.3%を占めている。アメリカ合衆国における居住年数は、20年以上居住しているとする層（20年以上29年未満と30年以上をあわせた割合）が、半分以上となっており、居住年数は長期である。しかしながら、英語力を見ると、流暢、とてもよいをあわせても約3割で、あまりわからない、英語力なしとした回答が、4割を超えている。英語が話せないことは、移民の行動や可能性を縮小する要因となると考えられる。学校教育を受けた年数を見ると、高校卒業者と見られる12年以上の教育を受けているもの（10-12年と13年以上をあわせたもの）が、おおむね5割存在する。他方、6年以下が約2割、9年以下（6年以下と7-9年をあわせた値）も同様に5割となっており、教育経験で見ると、多様な層が存在している。

また、アメリカ合衆国における市民権の有無を見ると、ありが36.8%、なしが63.2%となっている。市民権の有無は、移民の社会的統合に影響をもたらす要素ではないかと考えられる。

家族状況を見ると、両親と子どもの核家族世帯が全体の55%、ひとり親と子13.6%、その他の親族も一緒に暮らしている拡大家族が10.7%、夫婦のみが9.9%、単身世帯が2.5%となっている。ペアレント・メンター事業に参

加した年を見ると、2010年以降が8割近くとなっており偏りがあることがわかる。この結果が、回答に影響を与えるかどうかについては注視していく。子どもの数は、平均では2.7人であり、3人が32.9%、2人が27.9%、1人17.5%、4人以上（4人及び5人以上）は、21.3%となっている。アメリカ合衆国において女性が子どもを産む数は平均で1.87人（2016年）となっており、研究対象層では子どもの数が多いことがわかる。

表1 回答者の属性

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
	0.4%	14.5%	44.3%	32.3%	7.2%	1.3%
合衆国居住年数	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 15年未満	15年以上 20年未満	20年以上 29年未満	30年以上
	1.3%	6.3%	21.4%	19.7%	32.4%	18.9%
子どもの数	なし	1人	2人	3人	4人	5人以上
	0.4%	17.5%	27.9%	32.9%	15.0%	6.3%
家族型	両親＋子	ひとり親＋子	拡大家族	夫婦のみ	単身	その他
	55.0%	13.6%	10.7%	9.9%	2.5%	8.3%
PMに参加した年	1990年代	2000-2004年	2005-2009年	2010-2014年	2015年以降	
	2.2%	5.8%	14.2%	43.1%	34.7%	
教育年数	6年以下	7-9年	10-12年	13年以上		
	19.9%	30.5%	32.7%	16.8%		
市民権	あり	なし				
	36.8%	63.2%				
英語力	流暢	とてもよい	よい	あまりわからない	なし	
	22.3%	9.9%	25.2%	29.8%	12.8%	

筆者作成

3.2 以前の仕事と現在の仕事

ペアレント・メンターを経験する前の仕事と、現在の仕事についてその種別を聞いた。この結果、減少したのは、非熟練労働は12%減少、サービス業は1.7%減少、専門職0.8%減少、自営業1.7%減少と減少傾向を示す反面、非営利組織において働く者は8.7%増加し、公的な職種についたものも同様に8.7%上昇した。失業率は以前の状況と現在の状況でわずかに減少したが、

依然として約3割と高率である。この点は、ホンの研究の中で言及された、ペアレント・メンターを経験したことによって教員やコミュニティ・オーガニゼーションなどの非営利組織で働く者が出てきて地域貢献度が上がるとした記述と一致し、これが量的な調査の中で客観的に明らかになった。雇用形態では、期限のない雇用が19.0%、臨時は35.5%となっており、安定性という意味では低位である。

表2 ペアレント・メンターを経験する前の仕事と現在の仕事

	非熟練労働	サービス業	非営利組織	専門職	自営業	公的な職種	失業中	その他
以前 n=242	18.2%	8.3%	2.5%	1.2%	2.5%	0.8%	31.8%	34.7%
以後 n=242	6.2%	6.6%	11.2%	0.4%	0.8%	9.1%	29.8%	36.0%
相違	▼12.0%	▼1.7%	△8.7%	▼0.8%	▼1.7%	△8.3%	▼2.0%	△1.3%

筆者作成

表3 現在の雇用形態

期限のない 雇用	臨時の 雇用	その他
19.0%	35.5%	45.5%

筆者作成

現在の職種と市民権（表4）及び現在の職業と英語力（表5）について考察する。米国市民権を持っていることで失業率は低い（表4）。また非熟練労働は市民権が米国以外の場合に、米国より割合が高くなっている（表4）。英語力と現在の職種では、英語力が低いほど失業率が高い（表5）。現在の職種と市民権及び、英語力との関係性についてSPSSを用いてカイ二乗検定を行って有意性を見た。まず、市民権との関係性は、 $P<0.5$ 、英語力との関係性は、 $P<0.001$ の水準で有意差が認められた。

表 4 市民権と現在の職種

n=242		市民権 (Citizenship)	
		米国	その他の国
現在の職種	非熟練労働	1.24%	4.96%
	サービス労働	2.48%	4.13%
	非営利組織	2.89%	8.26%
	専門的職業	0.41%	0.00%
	小規模自営業	0.00%	0.83%
	公的な仕事	3.72%	5.79%
	失業	13.64%	15.70%
	その他	12.40%	23.55%

筆者作成

表 5 現在の職種と英語力

		英語力					合計
		Fluent	Very Good	Good	Not Good	None	
今の仕事	未熟練労働	2.48%	0.00%	3.31%	0.41%	0.00%	15
	サービス労働	2.48%	1.24%	0.00%	2.48%	0.41%	16
	非営利組織	2.89%	0.83%	3.31%	2.89%	1.24%	27
	専門的職業	0.41%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1
	小規模自営業	0.41%	0.00%	0.41%	0.00%	0.00%	2
	公的な仕事	2.48%	0.41%	3.31%	3.31%	0.00%	23
	失業	5.37%	4.13%	7.02%	8.68%	4.13%	71
	その他	5.79%	3.31%	7.85%	11.98%	7.02%	87

筆者作成

表 6 市民権と現在の職種カイ二乗検定の結果

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	9.646 ^a	7	.210
尤度比	10.749	7	.150
有効なケースの数	242		

筆者作成

表7 英語力と現在の職種カイ二乗検定の結果

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	12.650 ^a	2	.002
尤度比	12.338	2	.002
線型と線型による連関	4.841	1	.028
有効なケースの数	242		

筆者作成

更に、市民権と雇用形態、及び英語力と雇用形態に関しても同様にSPSSを用いてカイ二乗検定を行って有意性を見ると、市民権と雇用形態 $P<0.1$ 、英語力と雇用形態 $P<0.001$ の確立で有意差が認められた。米国市民権があると常勤がわずかに高いが、その他の国では有期雇用が25.62%と圧倒的に多い(表8)。英語力との関係では、英語力が「よい」以下では、英語力がないほど有期雇用の割合が高い(表9)。

表8 市民権と現在の雇用形態

n=242		市民権 (Citizonship)	
		米国	その他の国
現在の雇用形態	常勤	11.16%	7.85%
	有期雇用	9.92%	25.62%

筆者作成

表9 英語力と現在の雇用形態

n=242		英語力				
		流暢	とてもよい	よい	あまりよく ない	なし
雇用形態	常勤	8.68%	1.65%	3.72%	4.13%	0.83%
	有期雇用	7.85%	2.89%	10.33%	11.16%	3.31%

筆者作成

表10 市民権と雇用形態

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	12.650 ^a	2	.002
尤度比	12.338	2	.002
線型と線型による連関	4.841	1	.028
有効なケースの数	242		

筆者作成

表11 英語力と雇用形態

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	25.628 ^a	8	.001
尤度比	24.485	8	.002
有効なケースの数	242		

筆者作成

3.3 ペアレント・メンター研修制度の評価

LSNA では、ペアレント・メンター事業への初年度の参加者に対して 3 ヶ月間の研修制度、毎週金曜日の研修を課している。研修の種類は、1) 学習技術、教授法研修、2) 専門的開発及び自己開発研修、3) 家族及び近隣地域に関する学習、4) リーダーシップ開発、5) 市民参加及びアドボカシー研修の 5 種類の研修を実施している。これらの研修は、20年間の間に内容や方法が少しずつ改善されている。アンケート調査ではこれらの研修への参加の有無を問うた。研修 3 家族及び近隣地域に関する学習への参加率が最も高く、研修 5 の市民参加及びアドボカシーに関する参加が最も参加率が低い。

表12 研修への参加

	研修 1 学習技術 n=206	研修 2 自己開発 n=201	研修 3 家族及び近隣 n=2012	研修 4 リーダーシップ 開発 n=207	研修 5 市民参加及び アドボカシー n=196
参加した	87.9%	88.6%	93.9%	89.4%	80.6%
参加していない	12.1%	11.4%	11.4%	10.6%	18.9%

筆者作成

3.4 ペアレント・メンター事業への参加を助けたと考えられる要素に関する主観的評価

本設問では、ペアレント・メンター事業への参加を助けたと考えられる要素に関しての主観的評価を聞いた。なお、これらの要素は、2014年度に実施した10人のペアレント・メンター経験者へのヒアリング（仁科 伸子，2015）の結果をコーディングし、その中から要素と考えられるものを抽出している。

表13 ペアレント・メンター事業への参加を助けたと考えられる要素に関する主観的評価

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
1) 参加に対する配偶者の援助があった n=224	5.4%	2.2%	28.6%	63.8%
2) 学校の教員のサポートがあった n=236	1.3%	0.8%	23.7%	74.2%
3) LSNAスタッフのサポートがあった n=235	0%	1.3%	20.0%	78.7%
4) 自分自身の受けた教育が参加を助けた n=230	0.9%	0.9%	27.0%	71.3%
5) 自分自身がPMであることを楽しんだ n=236	0%	1.3%	11.0%	87.7%
6) PMの役割の中で大切な存在と感ずることができた n=234	0%	20.7%	79.9%	0%
7) PMとして必要とされていると感じた n=220	1.8%	0.5%	22.7%	75.0%
8) 謝礼がもらえたことがモチベーションになった n=208	14.9%	12.5%	26.4%	46.2%
9) コーディネーターとして貢献することができた n=215	73.0%	7.0%	4.7%	15.3%
10) 英語力の向上のためのクラスを受講した n=216	45.4%	7.9%	18.1%	28.7%

筆者作成

3.5 現在の生活満足度

本設問では、ペアレント・メンターの生活満足度についてLisat- 9 を使用した。まず、9つの設問に関する回答結果を見てみる。設問項目の中で、「とても満足」が最も多いのは、8) 家庭生活、7) 自分の整容や身だしなみ、9) パートナーとの関係についてとなっている。反対に低いのは、3) 経済状況についてでは「とても満足」は15.6%と他の項目と比較してきわめて低い値となっている。

「どちらかという満足」「満足」「とても満足」をあわせた満足の値を算

出すると、9項目中7項目で9割を超えるものが満足と回答しており、2)仕事についてと、3)経済状況についてがそれぞれ80%台にとどまった。この結果から、生活満足度については、満足と感じている層がきわめて高い結果である。

ここで特筆すべき点は、6項目目の性的生活の満足度の回答が低い点である。Lisat-9は、もともと脊椎損傷などで手術やりハビリを行った後の生活の状況を把握するために改善されていった経緯から考えると、今回の調査においては、6番、7番の項目が省かれても満足度の総合得点で比較する用途であれば問題ないと考えられる。この点については、今後更に分析を進める上で得点化する場合において妥当性の高い方法を再検討する必要がある。

表14 生活満足度

設 問	とても 不満	不満	どちらか というと 不満	どちらか というと 満足	満足	とても 満足
	%	%	%	%	%	%
1) 生活全体について n=231	2.1	0.8	2.6	6.9	37.6	49.7
2) 仕事について n=220	6.4	3.2	6.8	11.4	40.0	32.3
3) 経済状況について n=218	4.6	3.2	10.6	33.5	32.6	15.6
4) レジャーについて n=225	3.1	1.8	4.0	17.3	38.7	35.1
5) 友人や知人との関係性について n=232	1.3	2.2	3.0	8.2	38.8	46.6
6) 性的生活について n=188	3.2	2.1	1.1	8.5	38.3	46.8
7) 自分自身の整容、身の回りについて n=230	0.9	0.4	0.4	3.0	27.0	68.3
8) 家庭生活について n=232	1.3	0	0.9	1.7	25.0	71.1
9) パートナーとの関係性について n=213	4.2	0.5	1.9	4.2	27.2	62.0

3.6 エンパワメント指標

エンパワメント指標については、主に国際開発分野で研究が進められているが、エンパワメントの定義そのものがひとつには定まっておらず、国、地域、ジェンダー、年齢等によって異なると考えられる。ここでは、過去に国際機関によって女性のエンパワメントに用いられたものを使用した。指標は、17項目から構成されており、経済、政治、公的サービス、健康・保健領

域、情報、近隣地域、コミュニティ、友人などの領域について4段階の答えを求めた。

このグループでは、10)生活に必要な情報にアクセスできる、11)自分が教育を受けることができる、15)家族の絆がある、16)友人がいるについて「まあそう思う」「そう思う」とした肯定が9割以上となっている。他方、「そう思わない」、「あまりそう思わない」とした否定的な回答は、2)有給の職についている、4)貯蓄がある、5)政治的に活動している、6)自分自身の要求に対して行動できるが肯定的回答の比率が高い。

各項目について、肯定的な回答があった場合に1点を得点し、1～17までの項目の合計をエンパワメントポイントとして加算すると、最高得点は、17点、最小点は0点であった。平均点は、11.29点となっており、分布は表16エンパワメント得点に示すとおりである。

表15 エンパワメント指標

	そう思わ ない	あまりそう 思わない	まあそう 思 う	そう思う
1) 経済的に安定している	8.8	16.2	51.4	23.6
2) 有給の職についている	37.7	18.4	19.7	24.2
3) お金を借りることができる人がいる	29.1	16.8	32.7	21.4
4) 貯蓄がある	33.2	18.0	30.4	18.4
5) 政治的に活動している	31.4	20.5	24.8	22.9
6) 自分自身の要求に対して行動することができる	50.9	5.0	11.9	31.6
7) 選挙で投票している	9.1	2.3	37.0	51.1
8) 公共サービスを利用できている	7.9	5.1	24.5	62.5
9) 必要としたときに医療を受けることができる	7.4	7.4	29.0	56.3
10) 生活に必要な情報にアクセスできる	3.1	6.2	35.1	55.6
11) 自分が教育を受けることができる	6.0	3.7	39.1	51.2
12) コミュニティのために奉仕活動をしている	10.0	7.7	38.9	43.0
13) 地域のグループに所属している	21.5	11.2	26.0	27.7
14) 教会や宗教のグループに所属している	22.3	10.0	22.3	45.5
15) 家族の絆がある	5.8	2.2	25.9	66.1
16) 友人がいる	2.3	4.5	25.3	67.9
17) 1人以上の信頼できる友人がいる	5.3	7.5	33.2	54.0

表16 エンパワメント得点

得点	取得者割合 (%)
0	2.9
1	0.4
2	1.2
3	2.1
4	0.4
5	2.1
6	2.9
7	3.3
8	4.1
9	9.1
10	5.8
11	8.7
12	12.0
13	12.0
14	12.8
15	9.1
16	5.4
17	5.8

3.7 ペアレント・メンターの経験から得たもの

ペアレント・メンターの経験から、自己肯定感の上昇、社会貢献意欲の上昇、学習意欲の形成、リーダーシップの開発、学校、コミュニティ・オーガニゼーションとの信頼感の上昇、子どもとの関係性の改善、近隣地域の課題への認識、近隣地域へのプライドの芽生え等に対して8～9割が肯定的に回答している（表17）。

ペアレント・メンター事業は、もともと学校での子どもたちの授業への取り組みを活発化し、言語的なハンディを補うために始められたものであったが、この結果からメンターとなった親自身の成長と変化もまた大きいということが客観的データから明らかになった。

4 まとめ

第一次集計からは、生活、自己の内面、地域との関係性、経済力等の変化の状況が明らかになった。

就業面では、非熟練労働やサービス業への従事者はわずかに減少し、非営

利組織での仕事と公的な仕事に就くものが増加していた。しかし就業は、英語力との関係性が有意であり、英語が話せない移民の場合、職につき経済的な安定を得ることが難しいことが明らかになった。

ペアレント・メンターの経験は、自分自身の役割を獲得する結果につながっている（表9）。また、約46.8%の回答者が、英語力向上のためのクラスを受講するに至った。

生活満足度については、今後ポイント化して集計するが、9項目全体として8割～9割が満足、とても満足として、高い肯定感を示しており、現在のメンターの生活満足度は充足しているものが多いと考えられる。

エンパワメントの状況に関しては、10) 生活に必要な情報にアクセスできる、11) 自分が教育を受けることができる、15) 家族の絆がある、16) 友人がいるについて9割を超える肯定的な回答が出ている反面、経済的な面では、非肯定的な回答を示していることについては、注視する必要がある。雇用状況に関してもフルタイムでの雇用は定率であった。この点について、今後の分析によって明らかにしていく必要がある。

エンパワメント得点（表16）では、平均は11.29点であるが、ばらつきを見ると、0点から17点までばらついている。今後、低位にとどまっている要因と同時に、高得点の要因を分析していく必要がある。

ペアレント・メンターの経験から得たもの（表17）では、ペアレント・メンター事業は、もともと学校での子どもたちの授業への取り組みを活発化し、言語的なハンディを補うために始められたものであったが、この結果からメンターとなった親自身の成長と変化も大きいということが明らかになった。

以上の結果を踏まえて、今後の分析を進めていくこととする。

表17 パアレント・メンターの経験から得たもの

	非賛同	ほぼ非賛同	ほぼ賛同	賛同
1) 自分自身の価値に気付いた	2.2	2.2	31.4	64.2
2) 自分自身に社会変革する力があると思える	3.7	9.6	46.6	40.2
3) もっと社会貢献したい	2.3	2.8	51.6	43.3
4) 人々はもっと信頼できると考えられるようになった	0.9	10.2	47.4	41.4
5) 自分はもっと成功できると考えられるようになった	0.5	1.8	34.5	63.2
6) 自分自身の社会における役割を認識した	1.0	5.3	46.4	47.3
7) PM事業の中でメンターに出会った	3.8	1.0	34.4	60.8
8) 自分の子どもの学習を助けることができる	0.9	0.4	21.2	77.4
9) 人前で話すことができるようになった	1.8	5.4	34.8	57.9
10) 物事に対して意見がある	0	2.7	30.3	67.0
11) 自分のゴールが見つかった	0	2.7	29.2	68.0
12) 学校に対する理解が深まった	0.4	4.0	23.9	71.7
13) 自分が暮らす地域に対する誇りを覚えている	3.2	10.8	37.4	48.6
14) 自分自身の暮らす近隣地域のためにもっと働きたい	1.4	9.3	40.0	49.3
15) 自分自身が社会の中の重要なムーブメントだ	8.0	16.0	40.8	35.2
16) 自分の中にリーダーシップを見つけた	0.9	4.6	33.3	61.1
17) 自分自身の可能性を見つけた	0.5	5.0	37.4	57.2
18) もっと人を支援することができる	1.3	1.8	36.6	60.4
19) もっと学びたいと思う	0.9	0.9	19.2	79.0
20) 経済的な自立の道を見つけた	4.1	7.8	40.2	47.9
21) 経済的に家族をサポートすることができる	6.4	11.4	42.0	40.2
22) 教育を受けたい	1.40	1.4	27.3	70.0
23) もっと学校のために働きたい	3.6	2.7	27.1	66.5
24) 教師になりたい	15.0	16.4	34.3	34.3
25) 自分の子どもとの関係がよかった	2.2	2.2	24.6	71.0
26) 近隣地域の問題がもっと明確化された	2.3	2.7	36.4	58.6
27) より自由になった	2.7	8.5	31.7	59.8
28) 学校のスタッフへの信頼感が増した	1.4	3.2	37.1	58.4
29) LSNAのスタッフを信頼している	0.9	3.1	26.8	69.2
30) 生活が改善されたと感じる	0.9	2.3	26.8	70.0
31) 自分のゴールにたどり着いたと感じる	1.4	4.5	32.3	61.8

引用文献

HongSue, *A Cord of Three Strands: A New Approach to Parent Engagement in Schools*. Harvard Education Press, 2011.

Warren R. M., *Dry Bones Rattling: Community Building to Revitalize American Democracy*. Princeton University Press, 1995.

仁科 伸子, 就労を通じた女性のインテグレーションの過程に関するインタビュー記録 —ペアレント・メンター事業参加者のインタビュー結果—, 『海外事情研究』第43巻第1号. 2015.

The Primary Aggregate of a Study on the Empowerment of Female Immigrants in the Logan Square Neighborhood of Chicago, United States

NISHINA Nobuko

Abstract

This paper presents the primary aggregate of the study on women's empowerment in a neighborhood activity sponsored by the non-profit organization Logan Square Neighborhood Association in Chicago, also known as LSNA. The organization was founded 50 years ago to improve the lives of immigrants in the community. In 1995 the LSNA initiated a program with the local primary school to provide parent mentors to the classroom. The program has been helping children achieve academic success and has produce leaders not only for the local school but female community leaders as well (Nishina, 2015).

The purpose of this quantitative study is to identify the factors of empowerment in the community organization resulting from the program. From an examination of the primary aggregate, four things are already clear. First, subjects reported large increase in personal growth through increased self-esteem. Increased self-esteem, however, did not necessarily translate into economic success, which showed smaller gains. Second, subjects reported increased participation in civic society. Third, the subjects showed increased volunteerism in non-profit organizations such as the community organization after joining the program. However, employment proved to be a function of English language capacity. And, fourth, empowerment scores show a wide disparity between the "highly empowered" and those who are not highly empowered.

The study concludes that the program has not only improved student learning but also increased the self-confidence and self-esteem of those

parents who became mentors.

The further study will clarify the factors of empowerments and the how they make immigrant women more independent.

Keyword : Immigrant, empowerment, LSNA, parent mentor.